Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-08

現代スウェーデン語における疑似主語構文の分析

當野, 能之

(Citation)
神戸言語学論叢,11:87-99

(Issue Date)
2018-03-15

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010273

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010273

神戸言語学論叢 第11号
2018年 (平成30年) 3月
87–99頁

Kobe Papers in Linguistics Vol. 11
March 2018
pp. 87–99

現代スウェーデン語における擬似主語構文の分析

當野 能之

大阪大学

1. はじめに

英語の結果構文 (resultative construction) において、動詞が選択しない項が目的語 (いわゆる、擬似目的語 (fake object)) として現れることはよく知られていて、これまで様々な分析が成されてきた (Simpson (1983), Carrier and Randall (1992), Goldberg (1995), Levin and Rappaport Hovav (1995), 影山 (1996), Washio (1997) など)。また、擬似目的語を含む結果構文がゲルマン諸語に広く見られる現象であることもこれまでの先行研究から明らかになっている (Kaufmann and Wunderlich (1998), Lødrup (2000), Toivonen (2003), Oya (2002) など)。北ゲルマン語に属するスウェーデン語も例外ではなく、次の例からも明らかなように、結果構文において擬似目的語が現れうる[1]。

(1) a. Han skrek sig hes. / *Han skrek sig.
he shout.PST REFL hoarse / he shout.PST REFL
「彼は叫びすぎて声が枯れた。」
b. Hon sjöng sin son till sömns./ *Hon sjöng sin son.
she sing.PST REFL.POSS son to sleep / she sing.PST REFL.POSS son
「彼女は歌をうたって自分の息子を寝かせた。」

上記の (1a,b) では、それぞれ再帰代名詞*sig*と*sin son* 'her son' が動詞によって選択されていない項であることが分かる。一方、動詞が選択しない項が現れる構文で、これまで研究で取り上げられることのなかったものとして次のような文が存在する。

(2) a. Snön regnade bort. / *Snön regnade.
snow.DEF rain.PST away / snow.DEF rain.PST
「雨が降って雪が消えた。」
b. Marken växte igen med ljung. / #Marken växte.
ground.DEF grow.PST covered with heath / ground.DEF grow.PST
「ヒースが繁って地面が覆われた。」

上記の例文（2a,b）においては主語名詞句である*snön* 'the snow'と*marken* 'the ground'がそれぞれ動詞によって選択されていない項であることが分かる。主語として現れる名詞句はむしろ、動詞の直後に現れる*bort* 'away'や*igen* 'closed'など（以後これを仮にXPと呼ぶことにする）の意味的な項であるとみなすことができる。本稿ではこのような動詞が選択しない項が主語として現れる項を擬似主語（fake subject)、また擬似主語を含む文を擬似主語構文と呼ぶことにする。筆者の知る限り、動詞の選択しない項が主語として現れる現象は、スウェーデンにおけるスウェーデン語研究においても、また、他言語の研究においても無いように思われる。そこで本稿では、スウェーデン語における擬似主語構文の記述を行い、更に当該の構文がどのように分析することが可能であるか考察したい。

2. 擬似主語構文の特徴

スウェーデン語に擬似主語構文が存在するといっても、それは非常に有標な構文であることは間違いない。擬似主語が現れるのは自動詞構文に限られ、他動詞構文の主語に動詞が選択しない項が現れることはない。したがって、スウェーデン語の擬似主語構文は以下のような統語構造と文法関係を持った構文に限られる[2]。

(3) 統語構造： $[_{IP/CP}$ NP (V_{FINITE}) $[_{VP}$ $(V_{NONFINITE})$ XP$]]$
文法関係： SUBJ (PRED) (PRED) OBL

以下ではいくつかの動詞クラス毎に擬似主語構文を見ていく。擬似主語構文に現れる動詞は基本的に自動詞で、外項を取らない非対格自動詞の一部が現れる。まず例文 (2a) でもみたように、*regna* 'rain', *snöa* 'snow', *blåsa* 'blow'などの天候動詞 (Weather verb) が擬似主語構文に現れる。これらの動詞は英語などの天候動詞と同様に虚辞 (*det*) を主語として取る。

(4) Det {snöade / regnade / blåste} igår.
it {snow.PST / rain.PST / blow.PST } yesterday
「昨日，｛雪が降った／雨が降った／風が吹いた｝。」

天候動詞が現れる擬似主語構文を考えると、天候動詞は項構造を持たず、主語として現れる項はXPの意味的な項にあたるものと考えられる。主語として現れる項の意味的な役割には、(5a,b) のように状態変化の主体が現れる場合と、(5c) のように位置変化の主体が現れる場合がある。どちらの場合も文の意味は、動詞によって表された出来事が原因となって、ある別の出来事が起こったという因果関係を表している。

(5) a. Vägarna snöade igen under natten. (SS)
road.PL.DEF snow.PST closed under night.PST
「それらの道路は夜間の間，雪のために通行不能になった。」
b. Två år i rad har tävlingen regnat bort …(SB)
two years running have.PRES competition.DEF rain.PERF.P away …
「二年続けてその競技会は雨で流れた。」
c. Tegelpannor hade blåst ner från taket.
roofing.tile.PL have.PST blew.PERF.P down from roof.DEF
「屋根の瓦が風で屋根から落ちた。」

更に、天候動詞のように項をひとつも持たない動詞ばかりでなく、*växa* 'grow'，*gro* 'grow' (Grow verb) のような動詞も擬似主語構文に現れる。これらの動詞は通常、成長する主体を主語として取るが、XPの意味的な項を擬似主語として取ることもできる。その場合，(6a) にあるように植物などが育つ場所を主語としてとる場合や、(6b) のように育つ主体に付随するものを主語として取ることができる。どちらも主語の状態変化を表す。動詞の項は (6b) のように現れなかったり、(6a) のように斜格として現れたりする。文の意味を考えるとこの場合も、動詞によって表された出来事が原因となって、別の出来事が起こったという原因・結果の関係が表されている。

(6) a. Marken växte igen med ljung. / #Marken växte.
ground.DEF grow.PST covered with heath / ground.DEF grow.PST
「ヒースが繁って地面が覆われた。」
b. …allergier kan växa bort med åldern. (SS)
…allergi.PL can grow.INF away with year.PL.DEF
「アレルギーは成長するにつれ、年とともに無くなる可能性がある。」

また、*flöda* 'flow'，*rinna* 'stream'，*svämma* 'spill'，*droppa* 'drip'のような液体の移動を表す動詞 (Flow verb) もXPの意味的な項を擬似主語として取る。これらの動詞は通常、液体や液体の中を移動する物を主語として取る。しかし以下の例からも分かるように、液体が流れる場所を意味する名詞句を主語として取り、そこから液体があふれるという事態を描写する。この場合も、動詞によって表される「流れる」という出来事が原因となって、液体が容器からあふれるという因果関係が表現される。

(7) a. Hennes ögon svämmar över av tårar.
her eye.PL spill.PRES over of tear.PL
「彼女の目は涙で溢れている。」

b. Badkaret rann över när hon sänkte sig ner. (SS)
bathtub.DEF flow.PAST over when she lower.PAST REFL down
「彼女が浸かると浴槽が溢れた。」

以上をまとめると、①いわゆる非対格自動詞と呼ばれるものの一部が擬似主語構文に現れる。②擬似主語としてあらわれる項はXPの意味的な項である。③文の意味は動詞の表す出来事が原因となり、XPの表す出来事が結果として起こるという「因果関係」であるという点が挙げられる。但し、若干ではあるが他動詞がこの構文に現れることがある。その際には、対応する他動詞文が存在することから、一種の自他交替を起こしている可能性が考えられる。

(8) a. Dörren slog {upp/igen}.
door.DEF hit.PST {open/closed}
「ドアが｛開いた／閉じた｝。」
b. Peter slog {upp/igen} dörren.
P. hit.PST {open/closed} door.DEF
「ペーテルがドアを｛開いた／閉じた｝。」
(9) a. Trafiken korkade igen på grund av en rad trafikolyckor.
trafic.DEF cork.PST closed because of a series car.accident.PL
「交通は一連の交通事故により止まった。」
b. En rad trafikolyckor korkade igen trafiken.
a series car.accident.PL cork.PST closed trafic.DEF
「一連の交通事故が交通を止めた。」

先に見た天候動詞の中でも、*blåsa* 'blow'は他動詞用法を持つため同様に一種の自他交替を起こす。

(10) a. Segeln blåste sönder.
sail.DEF blow.PST broken
「セールが風でボロボロになった。」
b. Vinden blåste sönder segeln.
wind.DEF blow.PST broken sail.DEF
「風が吹いてセールをボロボロにした。」

これらの例が一種の自他交替であるとすると、他動詞から自動詞が派生するのか、あるいはその逆か、といった問題を考える必要があるが、この点に関しては今後の課題としたい。

3. XPのステイタス — 結果句か不変化詞か —

これまでの例からも分かるように、擬似主語構文は原因事象と結果事象が一つの節で表されている。例えば，(2a) を例に取ると「雨が降る」という出来事が原因となり、「雪が消える」という結果事象が起こったという因果関係をもつ二つの出来事が一つの節で表現されている。このような事象構造あるいは意味構造を一つの節で表現するものには、結果構文 (resultative construction) と不変化詞動詞構文 (verb-particle construction) が存在する。以下では、当該の構文が不変化詞動詞構文の一種であり、これまでXPと呼んできたものは結果構文に現れる結果句ではなく不変化詞であるということを示す。

スウェーデン語では、結果構文と不変化詞動詞構文に様々な違いがあるが、以下では、ほぼ同義の表現 — 結果構文に現れる*till döds* 'to death'という前置詞句と不変化詞動詞構文に現れる*ihjäl* 'to.death'という不変化詞 — を例に、結果構文と不変化詞動詞構文の違いを二点に絞って見る。

両構文には、音韻的・統語的・形態的な違いが存在する。まず、音韻的な違いとしては次のような点が挙げられる。結果構文では動詞・結果句が共にアクセントを持つのに対し、動詞不変化詞構文においては動詞のアクセントが失われ、不変化詞がアクセントを持ち、動詞と不変化詞がひとつのアクセントユニットを成すと言われている。擬似主語構文においては、動詞に強勢がおかれず、そのあとに現れる語にアクセントがおかれる。従って、音韻論的な観点からは不変化詞動詞構文であるということができる。

次に統語的な違いを見てみる。両者は目的語と結果句・不変化詞の相対的な位置が異なる。下の例からも分かるように結果構文において結果句は目的語の後に現れ、それより前に位置することは無い。一方、不変化詞動詞構文では不変化詞は常に目的語より前に現れ、目的語より後ろに置かれることはない。

(11) a. Peter sköt (*till döds) Sven (till döds).
P. shoot.PST to death S. to death
b. Peter sköt (ihjäl) Sven (*ihjäl).
P. shoot.PST to.death S. to.death
「ペーテルはスヴェンを撃ち殺した。」

但し、この差異は目的語がある場合つまり他動詞文において見られるものであり、自動詞構文である擬似主語構文においては見ることができない。

形態論的な違いとしては、動詞が過去分詞の時に両者に違いがでる。下記の例からも分かるように、不変化詞は動詞が過去分詞の時には動詞に前接するのに対して、結果構文において結果句が動詞に前接することはない。

(12) a. Sven blev {skjuten till döds / *tilldödsskjuten}.
S. become.PST {shoot.PAST.P to death / to.death.shoot.PAST.P }
b. Sven blev {*skjuten ihjäl / ihjälskjuten}.
S. became.PST {shoot.PAST.P to.death / to.death.shoot.PAST.P }
「スヴェンは撃ち殺された。」

この点に関しても、擬似主語構文は不変化詞動詞構文と同じ振る舞いを示し、結果を表す語（下の例では*bort* 'away' や*igen* 'closed'）が動詞に前接しなければならない。

(13) a. Snön är {*regnad bort / bortregnad}.
snow.DEF be.PRES { rain.PAST.P away / away.rain.PAST.P}
「雪は雨が降って消えた。」
b. Marken är {*växt igen / igenväxt} med ljung.
ground.DEF be.PRES {closed.grow.PAST.P / closed.grow.PAST.P} with heath
「地面がヒースで覆われた。」

以上、音韻的・形態的な観点からこれらの擬似主語構文は不変化詞動詞構文であるということができる。ところで、スウェーデン語の不変化詞には前置詞としての用法を持つものや副詞としての用法を持つものの他に、前置詞句から発達したものや形容詞としての用法を持つものも存在する。例えば，*sönder* 'broken'，*torr* 'dry'は共に形容詞であるが前者が不変化詞としての用法をも持つのに対し、後者は形容詞としての用法しかない。下の例からも分かるように、擬似主語構文に現れうるのは不変化詞としての用法を持つ*sönder*のみであり、これも当該の構文が不変化詞動詞構文の一種であることを裏付けている。

(14) Segeln blåste {sönder/*torr}.
sail.DEF blow.PST {broken/dry}
「セールが風で{ボロボロになった/乾いた}。」

4. 分析

以下では擬似主語構文の項構造がどのように決定しているか分析する。本稿ではまず，動詞の意味構造と不変化詞の意味構造が合成し、そこから項構造が決定するという分析を試みる。次節ではその他の分析の可能性を考察する。

議論に入る前に本稿で仮定する動詞の意味構造と不変化詞の意味構造を (2a, b) を例に簡単に見てみる。ここでは Jackendoff (1983, 1990) の語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) を採用する。 (2a) の*regna* 'rain'の意味構造は Jackendoff (1983:185) にならい

(15a) のように記述する。*regna*には変項が無いため，0項の動詞ということになる。また，(2b) の *växa* 'grow'の意味構造は (16b) のように記述でき、変項があることから通常は項をとることが分かる。問題となるのは不変化詞の意味構造である。不変化詞の意味構造としては２つの考え方があると思われる。(2a) の*bort* 'away'を例に取ると，ひとつは (15b) のようにイヴェントであり変項を取る意味構造であるとする立場と (15c) のように経路概念のみであるとする立場である。しかし、擬似主語構文を考えると，主語として現れる項は不変化詞の意味的な項であると考えられるので (15b) の意味構造が妥当であると思われる。(主語項が不変化詞の項ではなく、構文文法で言うところの構文の項 (正確には構文の参与者役割) であるとする分析は次節で試みる。)

(15) a. [GO ([RAIN], [DOWNWARD])]
b. [GO_{IDENT} ([x], [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])])]
c. [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])]
(16) a. [GO_{IDENT} ([x], [$TOWARD_{IDENT}$ ([BIG])])]
b. [GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])]
c. [TO_{IDENT} ([COVERED])]

以上のような動詞と不変化詞の意味構造を仮定した上で、それぞれの意味構造がどのように合成されるか考えてみたい。これまでにも見てきたように、擬似主語構文は「原因・結果」という事象構造を持つ。このような事象構造を持つものには、大まかに言ってこれまで三つのタイプの意味構造が提案されてきている。原因事象をA、結果事象をBとすると以下のようにまとめることができる。

(17) a. [CAUSE (A, B)]
b. [A [RESULT (B)]]
c. [B [BECAUSE (A)]]

(17a) はCAUSE関数が原因を表す出来事項 (A) と結果を表す出来事項 (B) を取るというものである。この際二つの事象は意味構造においてどちらも主要部に属する。この分析を取る代表的な研究としてはLevin and Rappaport Hovav (1995), 影山 (1996) 等がある。(17b) の分析はPinker (1989), Matsumoto (1996) に見られる分析で，原因を表す事象 (A) が意味的な主要部にあり、それが、結果を表す事象 (B)を意味的な付加詞として取るとするものである。ここではRESULT関数を用いているが、これはMatsumoto (1996) による。Pinker (1989) はEFFECT関数を用いている。最後の (17c) は (17b) とちょうど逆の関係にあるもので、結果事象 (B) が意味的主要部となり、原因事象 (A) が意味的な付加詞となるものである。ここでは仮に原因を表す関数としてBECAUSEという関数を立てて用いている。この意味構造を

用いた分析は語彙従属 (Lexical Subordination) 分析と呼ばれ、代表的な研究にはLevin and Rapoport (1988), Spencer and Zaretskaya (1998) 等がある。

以上、3つの分析は統語的主要部である動詞が、意味構造においても主要部であるか (=(17a), (17b))、あるいは意味構造においては付加詞であるか (=(17c)) という点で二つに分けることができる。以下ではこの点を項構造へのマッピングとの関連から考察してみたい。まず、(2a) を例に考える。

(18) Snön regnade bort. (=(2a))
snow.DEF rain.PST away
「雨が降って雪が消えた。」

動詞 (=(15a)) と不変化詞 (=(15b)) の意味構造をそれぞれ、(17a-c) に適用したのが以下である。動詞の意味構造が原因事象 (A) に、不変化詞の意味構造が結果事象 (B) に相当する。少しでも分かりやすくするために動詞の意味構造の部分には点線で下線を施し、不変化詞の意味構造の部分には実線で下線を付してある。

(19) a. [CAUSE ([GO ([RAIN], [DOWNWARD])],
[GO_{IDENT} ([x], [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])])])]
b. [[GO ([RAIN], [DOWNWARD])]
[RESULT ([GO_{IDENT} ([x], [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])])])]]
c. [[GO_{IDENT} ([x], [TO_{IDENT} ([NONEXSISTENT])])]
[BECAUSE ([GO ([RAIN], [DOWNWARD])])]]

上記の例から分かるのは、合成された意味構造の中に変項はひとつしかなく、それが主語として実現するということである。(19a-c) のどの分析を取ったとしても、意味構造から項構造への写像には問題が無いものと思われる。例えば、(19b) の意味構造では不変化詞の意味構造が意味的付加詞になり、その変項が項構造に写像されることになる。意味的な付加詞から項構造への写像には様々な制約があるものと思われるが、この場合は意味的主要部である動詞の意味構造に変項がないために、意味的主要部から項構造への写像は存在しない。従って、意味的な付加詞からの写像を妨げるものはないものと思われる。

次に動詞が項を持つ場合を考えたい。(2b) を例に考えて見る。

(20) Marken växte igen med ljung. (= (2b))
ground.DEF grow.PST covered with heath
「ヒースが繁って地面が覆われた。」

動詞 (=(16a)) と不変化詞 (=(16b)) の意味構造をそれぞれ、(17a-c) に適用したのが以下である。

(21) a. [CAUSE ([GO_{IDENT} ([x], [$TOWARD_{IDENT}$ ([BIG])])],
[GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])])]

b. [[GO_{IDENT} ([x], [$TOWARD_{IDENT}$ ([BIG])])]
[RESULT ([GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])])])]

c. [[GO_{IDENT} ([y], [TO_{IDENT} ([COVERED])])])]
[BECAUSE ([GO_{IDENT} ([x], [$TOWARD_{IDENT}$ ([BIG])])])])]

意味構造から項構造への写像を考えると、不変化詞の意味構造の中の変項である y は項構造に写像するが、動詞の意味構造の変項である x は項構造には写像しない。この場合、(21b) の場合には意味的主要部からの項構造への写像は行われず、意味的付加詞からの写像が行われることになる。これは明らかに不自然であり、(21b) の意味構造の設定は適切ではないと言わなければならない。次に (21a) に関しても、CAUSE関数の二つの出来事項のうち、不変化詞の意味構造のみから項構造への写像が行われ、動詞の意味構造から写像が行われないのかを示すことができない。(21c) の語彙従属分析が最も自然に写像のパターンを説明できると思われる。(21c) では不変化詞の意味構造が意味的主要部となり、動詞の意味構造が意味的な付加詞となっている。意味的な主要部である不変化詞の意味構造から項構造への写像がなされ、意味的な付加詞である動詞の意味構造からは項構造への写像は起こらないということになり、擬似主語構文における意味構造から項構造への写像のパターンを自然に説明することができる。

(21c) の意味構造を採用することの利点はもう一つある。(8)-(10) に見られる自他交替にも似た現象をうまく説明できる。自動詞文 (=(8a), (9a), (10a)) と他動詞文 (=(8b), (9b), (10b)) の間で意味構造の組み換えがあると仮定すると、他動詞文は (17a) あるいは (17b) の意味構造を持ち、動詞と不変化詞の意味構造の双方から項構造への写像があるのに対して，自動詞文では動詞の意味構造が意味的付加詞になり、動詞の意味構造からは項構造への写像が行われなくなると説明することができる。

以上、擬似主語構文においては、動詞と不変化詞の意味構造が (17c) に見られるような形で合成されて、項構造への写像が行われるという分析を試みた[3]。

5. その他の分析の可能性

前節では擬似主語構文に対し、意味構造レベルでの分析を試みた。本節ではそれ以外のレベルでの分析が可能であるか考えてみたい。具体的には、項構造レベル・統語構造レベル・構文レベルでの分析を試みる。

5.1.「項構造合成」分析

まず、最初の分析は動詞の項構造と不変化詞の項構造が合成し、全体の項構造が出来上がるというものである。ここで一つ問題となるのは不変化詞の項構造である。Jespersen (1924)、Jackendoff (1973) などが述べているように、前置詞が目的語を取るのに対して、不変化詞は目的語を取らない。従って、項構造を考えた場合に、前置詞が一項であるのに対して、不変化詞が0項であるという分析がまず可能である。不変化詞は確かに目的語を取らないが、*He is out.*のように主語を取ることは可能である。従って、ここでは仮に不変化詞が項を持つと仮定して話を進める。

まず、(2a) を例に取り考えてみたい。天候動詞*regna* 'rain'は項を取らない動詞であるから、不変化詞の項構造と合成し、不変化詞の項が全体の項として受け継がれるという分析も可能であると考えられる。

(22) a. *regna* 'rain' < > + *bort* 'away' < THEME>
b. *regna bort* <THEME>

しかし、動詞が項を持つ場合を考えると項構造の合成ではうまく行かないというのが分かる。(2b) を例に考えると、動詞*växa* 'grow'も不変化詞*igen* 'covered'も項を持つ。しかし、全体の項として受け継がれるのは不変化詞の項のみである。項構造の合成でこれらを分析しようとすると、「内項を持つ動詞の項構造と内項を持つ不変化詞の項構造が合成する場合には不変化詞の項が継承される」としたルールを立てなければならず、アドホックであると言わざるを得ない。

(23) a. *växa* 'grow' <THEME1> + *igen* 'covered' <THEME2>
b. *växa igen* <THEME2>

5.2.「繰上げ」分析

動詞が選択しない項が主語として現れる構文として、「繰上げ構文」(raising construction) が存在する。

(24) a. He$_t$ seems [t to be sick].
b. Han$_t$ verkar [t vara sjuk].
he seem.PRES be.INF sick
「彼は病気のようだ。」

GB理論では繰り上げ構文に現れる主語が上記の例文の痕跡の位置から主語位置へ移動すると分析されている。従って、主語として現れている名詞句は主動詞によって選択された項

ではない。果たして、動詞によって選択されていない主語を含む擬似主語構文を以下のように、「繰り上げ構文」と同様に、分析することは可能であろうか？

(25) Snön$_t$ regnade [t bort].
snow.DEF rain.PST away

まず、繰り上げ構文に現れる*seem*をはじめとする繰り上げ述語は意味役割付与の問題を考えてみたい。繰り上げ述語は補文へは意味役割は付与するが、主語位置へ付与する意味役割はないと分析される。主語として現れる名詞句は移動前の位置で述部から意味役割を付与され、その後主文の主語位置へ移動する。繰り上げ述語が主語位置へ意味役割を付与しない証拠には、次の文のように主語位置に虚辞が生じるということがしばしば挙げられる。

(26) a. It seems that he is sick.
b. Det verkar som att han är sjuk.
it seem.pres as that he is sick

擬似主語構文に現れる動詞が以上のような特徴を持っているか考えたい。まず、補文に付与する意味役割を持つかどうかであるが、擬似主語構文に現れるどの動詞も補文をとることはなく、補文に付与する意味役割を持たない。次に、主語位置に付与する意味役割を持たないかという点であるが、天候動詞は主語位置に付与する意味役割は持たない。その証拠として、これらの動詞は虚辞を主語としてとる。しかし、擬似主語構文に現れるそれ以外の動詞は主語位置に付与する意味役割を持つ。以上，意味役割という観点から見た場合、擬似主語構文に現れる動詞には繰り上げ述語との共通性はなく、「繰り上げ」分析には問題があるものと思われる。

5.3. 「構文」分析

最後に、擬似主語構文が構文文法で言われている意味での「構文」であるとする分析を考えてみる。Goldberg (1995) の構文文法では構文の参与者役割 (participant role) と動詞の項役割 (argument role) が融合 (fusion) を起こすことにより、文の項構造が決定する。この分析を採用すると、擬似主語構文においては構文の参与者役割のみが項として実現し、動詞の項役割は実現しないということになる。しかし、この分析には問題がある。もし仮に構文の参与者役割のみが実現し、動詞の項役割が実現しなくてもよいということが一般的に許されるとすると、あらゆる動詞が (それぞれの構文の制約に違反しない限りにおいて、) どのような構文にでも現れることが可能になってしまい、構文文法における説明力を弱めてしまうことになる。そこで Goldberg (1995:65) は構文の参与者役割と動詞の項役割が最低一つは共有されなくてはならないという制約を設けている (Matsumoto (1996) のShared

Participant Condition も参照のこと)。役割が一つも共有されていない擬似主語構文はこの制約に違反していることになり、構文文法での分析は困難であると思われる。

6. まとめ

本稿ではまず、動詞が選択しない項が主語として現れる「擬似主語構文」と呼ばれるスウェーデン語の構文を考察した。1節と2節では当該の構文の基本的な記述を行った。3節では当該の構文が不変化詞動詞構文の一種であることを明らかにした。また，4節では，当該の構文に対して意味構造レベルでの分析を試みた。5節ではそれ以外のレベル (項構造・統語構造・構文) での分析を考察し、どれも問題があることを見た。

註

* 本稿は筆者が神戸大学大学院に在籍していた当時、松本曜先生に指導していただいた内容を含む。また、例文のチェックは大阪大学言語文化研究科研究生のMárton András Tóthさんにお願いした。ここに記して感謝の意を表します。むろん、誤りがあるとすれば全て筆者の責任である。

1 本稿で使用する略号は次の通りである。DEF =definite; INF =infinitive form; PAST.P = past participle; PERF.P = perfect participle; PL = plural; PRES = present; PST = past; REFL = reflexive pronoun; REFL.POSS = reflexive possessive pronoun. また、(SS)と付された例文は辞書 *Svenskt språkbruk*.から、(SB) と付されている例文は, Språkbanken のコーパス Korp (https://spraakbanken.gu.se/korp/#?lang=en&stats_reduce=word&cqp=%5B%5D&corpus=) から取ったものである。

2 スウェーデン語の動詞は、主節において非定形 (non finite) である時は動詞句内に位置するが、定形である時にはIPあるいはCPの主要部の位置に現れる。また、従属節においては定形・非定形にかかわらず動詞は動詞句内に現れる。

3 筆者は疑似主語構文を含めたスウェーデン語の不変化詞動詞全般において、不変化詞の意味上の項が不変化詞動詞の内項として実現するという分析を行っている。詳しくは當野 (2014) を参照のこと。

参考文献

影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 東京：くろしお出版.

當野能之. 2014. 「現代スウェーデン語不変化詞動詞の項の実現」岸本秀樹・由本陽子 (編) 『複雑述語研究の現在』235–255, 東京：ひつじ書房.

Carrier, Jill and Randall, Janet. 1992. The argument structure and syntactic structure of resultatives. *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.

Goldberg, Adele. 1995. *Constructions.* Chicago : University of Chicago Press.

Jackendoff, Ray. 1973. The base rule for prepositional phrase. In Anderson, Stephen R. & Kiparsky, Paul (Eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, 345–356. New York, Holt: Rinehart and Winston.

Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and Cognitions*. Cambridge, MA: MIT Press.

Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.

Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin.

Kaufmann, Ingrid. and Wunderlich, Dieter. 1998. *Cross-Linguistic Patterns of Resultatives*. Working Papers "Theorie des Lexikons" 109. Düsseldorf: University of Düsseldorf.

Levin, Beth. and Tova R. Rapoport. 1988. Lexical subordination. *CLS*. 275-289.

Levin, Beth. and Rappaport Hovav, Malka. 1995. *Unaccusativity*. Cambridge, MA: MIT Press.

Lødrup, Helge 2000. Underspecification in lexical mapping theory: the case of Norwegian existentials and resultatives. In *Argument Realization*, Miriam Butt and Wilhelm Geuder (eds.), 171–188. Stanford, CA: CSLI.

Matsumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese*. Stanford, Tokyo: CSLI Publications and Kurosio Publishers.

Oya, Toshiaki. 2002. Reflexives and resultatives: some differences between English and German. *Linguistics* 40, 961–986.

Pinker, Steven. 1989. *Learnability and Cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Simpson, Jane. 1983. Resultatives. In *Papers in Lexical-Functional Grammar*, Lori Levin et al. (eds.), 143-157. Indiana University Linguistic Club.

Spencer, Andrew and Zaretskaya, Marina. 1998. Verb prefixation in Russian as lexical subordination. *Linguistics* 36, 1-39.

Toivonen, Ida. 2003. *Non-projecting word*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Washio Ryuichi. 1997. Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

辞書

Svenskt språkbruk. Ordbok över konstruktioner och fraser. 2003. Stockholm: NE Nationalencyklopedin.